

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名（姓、名）	ウエタ ケンジ 上田 憲嗣		授与番号 乙 584 号
学 位 の 種 類	博士 (スポーツ健康科学)	授与年月日	2023 年 2 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 2 項該当者 [学位規則第 4 条第 2 項]		
博士論文の題名	動作コーディネーションの存在論的考察 評価に関する研究を中心に		
審 査 委 員	(主査) 大友 智 (立命館大学スポーツ健康科学部 教授)	岡本 直輝 (立命館大学スポーツ健康科学部 教授)	
	山浦 一保 (立命館大学スポーツ健康科学部 教授)	岡出 美則 (日本体育大学 スポーツ文化学部 教授)	
論文内容の要旨	<p>本論文は、「動作コーディネーションの存在論的考察－評価に関する研究を中心に－」を主題とし、1)動作コーディネーション概念及びその研究動向の検討(研究課題Ⅰ)、2)動作コーディネーション能力の実態検証(研究課題Ⅱ及びⅢ)、並びに、3)児童を対象とした動作コーディネーション能力診断テストの検討(研究課題Ⅳ)を行った。</p> <p>序章では、動作コーディネーションの概念について検討し、問題提起を行い、研究の目的、研究の方法、及び論文の構成を説明した。</p> <p>第 1 章では、動作コーディネーションについて、その概念の理論的背景及び近年の研究動向を分析した(研究課題Ⅰ)。動作コーディネーションの概念は運動制御に関して新しい考え方を提供したこと、動作コーディネーションにおけるトレーニング実施方法の原則及び診断評価法には多数の提案が見られること、並びに、児童を対象とした動作コーディネーションの介入研究は多数行われているが、世界基準の評価法は確立されていないこと、を明らかにした。</p> <p>第 2 章では、動作コーディネーションについて、体力・運動能力との関係性の検討(研究課題Ⅱ)、及び、神経科学的評価手法による検討(研究課題Ⅲ)を行った。動作コーディネーションはコンディショニング能力と関連していること、及び、動作コーディネーションの運動課題は左外側前頭前皮質と一次感覚運動野の機能的結合を促すこと、を明らかにした。</p> <p>第 3 章では、児童を対象とした動作コーディネーション能力診断テストを検討した(研究課題Ⅳ)。ザクセン基礎運動テスト、KTK(Körperkoordinationstest für Kinder:児童用身体コーディネーションテスト)、ソフトボール投げ、及び、水泳運動を対象とした動作コーディネーション能力診断テストは、動作コーディネーションの診断法として信頼性及び妥当性に課題があること、を明らかにした。</p> <p>第 4 章では、研究課題ⅠからⅣの結果を踏まえて、動作コーディネーション能力は、体力・運動能力のテストとの関連の中に存在すること、並びに、単回のテスト結果のみではなく、2 回目のテスト結果との差分によって評価されることを考察した。これらを踏まえて、新たな動作コーディネーション能力評価モデルを構築した。</p> <p>以上から、動作コーディネーションの存在の考察、並びに、新たな動作コーディネーション能力評価モデルの構築は、今後の身体運動の捉え方に示唆を与えた。</p>		

論文審査の結果の要旨	<p>本論文は、近年、スポーツ健康科学分野において、大きな注目を集めている動作コーディネーションに焦点を当てた論文であった。動作コーディネーションは、人間の能力として本当に人間に備わっているのか、が不明であった。このリサーチクエスチョンに対して考察することが、本論文の主題であった。先行研究の検討を踏まえたこの着想は、独創性及び学術的意義が高いと評価できる。</p> <p>動作コーディネーションの存在について、第一に文献研究(研究課題Ⅰ)、第二に他の能力との相関関係的研究(研究課題Ⅱ)、並びに、第三に神経科学的研究(研究課題Ⅲ)から説明した。次に、動作コーディネーションが存在するのであれば、何らかの方法で測定することが可能であると考えられるため、現在各国で使用されている動作コーディネーションの評価法を検討した(研究課題Ⅳ)。これらの研究の構成は、体系的が高いと評価できる。</p> <p>これらの結果を踏まえて、動作コーディネーションの存在に関して、ハイデガーを援用して動作コーディネーションは人間に存在すること、並びに、ヴィゴツキーを援用して動作コーディネーションは関係性の中に存在することを考察した。2つの立場から存在を考察したこと、並びに、それらを融合させて新しい評価モデルの構築を行ったことから、本論文は高く評価できる。</p> <p>本論文を構成する4つの研究課題に関わり、それぞれの内容を4編の学術論文(筆頭著者)として、英文誌1編(原著論文: <i>Medicine & Science in Sports & Exercise</i> 54(4)、598-608、2022)、及び、和文誌3編(資料論文: 発育発達学研究(88)、11-21、2020、原著論文: スポーツ教育学研究 39(2)、1-11、2020、研究論文(実践研究): トレーニング科学 31(1)、45-52、2019)に掲載されており、学術的意義は高い。</p> <p>本論文は、「スポーツ健康科学分野の研究者や高度専門職業人に必要な専門的研究能力、ならびにその基礎となる豊かな学識を示した学術論文」とであると判断できる。</p> <p>以上、公聴会及び論文審査の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に十分達しているという判断で一致した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公聴会は2023年1月23日(月)12時~13時まで、びわこ・くさつキャンパスインテグレーションコア2F大会議室にて実施した。公聴会において、学位申請者は、出席者の質問に対して、適切な回答と説明を行った。続いて、同会議室にて対面およびオンライン会議システム(ZOOM)を適用し、13時~13時40分まで、主査・副査の4名による非公開の口頭試問を実施した。審査委員から本研究に関する質疑応答及び予備審査会において指摘した事項について修正した内容の質疑応答が行われた。学位申請者は、審査委員に対して丁寧に回答及び説明を行い、本論文が適切に加筆、修正されていることを確認した。さらに、今後の研究についての質問に対しても、発展性のある研究課題を明確に回答した。</p> <p>また審査委員会は、本論文申請者の業績、経歴や学会での評価により、十分な専門知識と豊かな学識を有すること、また外国語文献の読解においても十分な学力を備えていることを確認した。したがって本学学位規程第25条第1項により、これに関わる試験の全部を免除した。</p> <p>以上より総合的に判断して、本学学位規程第18条第2項により、博士(スポーツ健康科学 立命館大学)の学位を授与することが適当と判断した。</p>